

国の御魂の所在

延喜式内社・倭大國魂神社・倭大國敷神社二座

八百万の神々の御霊が影向する日本では多種多様な性格の神がいますが、国家という概念と結びついた大國魂神はそのなかでも非常にユニークであり、そこには日本独自の思想が表れています。今回は、日本各地の大國魂神を祀る神社の中から、徳島の倭大國魂神社および倭大國敷神社の二座にスポットを当て、「国魂」の概念とその現代における意味を問います。

いま目の前にある大いなる危機

——オキタさんはなぜ延喜式内社をはじめ、地域の古社に注目しているのでしょうか？

オキタ／私の本業は、経営的に伸び悩んでいる企業を復活させる仕事でして、各地の企業を訪問してはヒアリングを重ね、事業再生のための手段を探ってきました。その活動のなかで、各企業の問題点を導き出す作業がある総量に達したとき、それぞれの企業が抱える問題はその一社だけに帰属するものではなく、本質的な問題は根底の部分でつながっていると感じるようになりました。一方で、各地域の伝統や風習が失われている場面にたびたび直面し、愕然とすることが多々ありました。企業の抱える問題は、地域そのものや、そこに存在する伝統とも深くつながりがあることを強く感じるようになったのです。

このような失われゆく日本文化の最も根底にあるものは何であろうかと考えたところ、地域の中

オキタ／多くの古社で先祖伝来の古物や古文書が日々失われている状況にまず直面しました。住民や氏子、宮司さんによると、終戦直後の昭和二十年代前半ごろに各神社の古物や古文書がものすごく大量に処分されるという「破棄の大ブーム」が起ったようなのです。価値のある古い文物のほとんどが、その頃に大量に消滅しました。

戦中から戦後にかけての時代状況を思い浮かべれば分かることですが、当時、戦争に負けたことは、すなわち国家神道の信頼の瓦解であり、途方もない絶望感がともなうものでした。そのような雰囲気から、戦後、神社に人が全く来ない状況が起り、各地の宮司さんが貧窮する事態も起ったようです。

——古物や古文書が消滅すると、過去にさかのぼる手段は一切なくなってしまうのでしょうか？

オキタ／残されている手がかりとしては、口伝で受け継がれたエピソードや古文書の引用文、一部残っている古文書の切れ端などを手がかりにするほかありません。そのような一部からうろたえているものを復旧するための活動も試みています。が、こちらはかなり困難な状況に直面しています。

その昔は、家族間や地域間で重要なことが長老による口伝で語り継がれ、地域の共同作業によって共通体験が育まれていましたが、近年では核家族化が進み、情報の交わし合いをする機会が減ってしまいました。家族間や地域間で重要な話をす

心でその地域の固有性を保持しつつ各現象の素となつていくものが神社であることに、ある段階で気がつきました。神社が寂れたまま放置されているのに、表層的なことだけにとり組んでも本当の意味で日本が元気になるはずがない。企業や地域の表面的な現象をいくら個別に修復しても意味がなく、本質的な部分から立て直すには、神社という深層テーマに取り組む必要があると意識したのです。

——神社を調査するにあたり、ぶつかった問題は何か？



社名が刻まれた石碑が、延喜式内社の威厳を漂わせる。



延喜式内社 倭大國魂神社

オキタリュウイチ クリエイティブディレクター
昭和51(1976)年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで17億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

ることもほとんど無くなり、先にお話した「記録」の消失とともに、「記憶」の消失もまた同時に起こっているのです。

ここ数年、延喜式内社をはじめとする古い神社への取材の際に、最後の情報をもつ老人が亡くなってしまった(五年前まで生きていたから五年前に来てくれれば……)というような場面にたびたび遭遇しています。いま私たちは重要な過渡期にいます。この時期を逃してしまつと、わずかな手がかりさえも無くなってしまつてしまうでしょう。

——あらゆる手がかりが無くなつてしまつと、どういう状況が起こるのでしょうか？

オキタ／私たちにとって重要なルーツにさかのぼる手がかりが無くなると、本質的なものを全て想像するしかない時代が訪れます。日本文化の細部がなくなり、あらゆるものが平坦になってしまふのです。たとえば、日本といえば「おもてなし」といわれる。なぜかという、先日テレビで見たから(なぜか深い理由は分らない)というようなことになる。正月はたんなる余暇となり、各地の祭りはどんちゃん騒ぎのイベントと変わらない



過去のエピソードは失われてしまったが、織や提灯など、神社に伝わる古物を1点ずつ確認し、面影を偲ぶ。



倭大國魂神社を訪れ、宮司さん、氏子さんに取材するオキタ。

ものになるでしょう。

一方で、そのような細部の喪失は、日本人としての「誇り」や「尊厳」の喪失にもつながります。自分たちが信じるものがない民族は、他国から批判されても言い返す言葉もなければ、他国の侵入から守るべきものもありません。つまりは、そのような事態が進行する先には、日本人という民族性の喪失、日本という国家の消滅の危機が待っているのです。

「国魂の神」という不思議な概念

——延喜式内社こそ日本のルーツを探るための重要な手がかりであるとのことですが、その土地の記録や記憶と結びついている神様にはどんな種類があるのでしょうか？

オキタ／大きく分けて、日本の神は四つのタイプに分類することができます。一つ目は、その土地を開いた人物やその土地で活躍した人物、重要な役職を担った人物などを神として祀る「氏神」。二つ目は、草薙の剣のように神々人間が作ったプロダクトが神になる場合。三つ目は、三輪山や那智の滝のように自然環境そのものが神様になる場合。いわゆる神奈備ですね。四つ目は「土地」そのものが神様になる「国魂神」（国魂の神）という概念です。これは非常に理解し難いものなのですが、この三つのなかで最もユニークであり、私は以前から多大な関心を寄せています。

——自然神を祀ることと、国魂神という概念は違うのですか？

オキタ／自然はもともとある所与のものです。——自然神を祀ることと、国魂神という概念は違うのですか？

——日本各地に国魂神を祀る神社があるそうですが、その中でも特に注目している神社はありますか。

倭国の「国魂」を祀る唯一の神社

オキタ／阿波（徳島）の倭大國魂神社に祀られている「倭大國魂神」は、『日本書紀』にまで出てくる有名な国魂神です。ほかに、奈良県の大和坐大國魂神社や淡路島にある大和坐大國魂神社などに、「やまと」という地名が冠されています。倭が畿内に引越して大和になったという説など、盛んに議論されていますが、徳島の美馬市（旧美馬郡）周辺に古墳時代より前の古墳の原型のようなかたちの石室が近年大量に見出されていることや、奈良にある古墳の石棺の蓋が徳島産の青石をわざわざ運んで使用していることなど、とても気になる事実がいくつもあり、真相を追っているところです。

いずれにしても、「倭」という文字が使われている神社は全国でこの一社のみであり、県庁や都庁がその県以外の場所につくることが出来ないように、他の土地で祀ることが不可能な性質の神社であるため、私はとても重要な意味をもつ神社であると確信しているのですが、認知もされず、参拝者も著しく少ない。こんな状態で日本が本場の意味で元気になるイメージは到底もっていません。

——他に何か手掛かりはありますか。

オキタ／この倭大國魂神社からそう遠くない場所

国魂神は、人間が作った区分、都合上の生活区分を祀るものであり、非常に変わっています。たとえば、埴安姫（ハニヤスヒメ）は「土」、弥都波能売（ミツハノメ）は「水」の神格化ですが、国魂神という概念だけが、その領土区分そのものの神格化なのです。たとえば、尾張には尾張大國魂神、信濃には信濃大國魂神というように、それぞれの地に国魂神が存在しますが、そこはあくまでも人間の管理区分であるのに、神として祀られているのです。

不動産の例でいえば、土地の上にある建物を代表しているのが氏神や自然神であり、土地そのものを代表しているのが国魂神。不動産には土地のオーナーと建物のオーナーが居て、その協力関係で成り立っているわけですが、それと同じで、神々にも土地の神とその上にある表徴物の神が存在しているのです。



供物台の裏の神紋の幕を上げると、そこに素木の本殿が垣間見える。

【延喜式内社とは何か？】

延喜式内社とは、延長5年（927年）にまとめられた『延喜式』の巻九・十に収められた「延喜式神名帳」に記載されている神社のことを指します。これらは、律令制のもと祭祀を司る神祇官から幣帛（神前への捧げ物）を受けとっていた神社であり、それゆえに非常に格式の高い神社であったと考えられます。延喜式内社は、全国で2,861社3,132座あったと記録されます。今日では、江戸期や明治期創建の歴史が浅い社や統廃合された社も多く、日本のルーツを知る上で、この「延喜式神名帳」の記述はとても重要な手掛かりになります。



倭大國魂神社宮司の二宮氏から情報を聞く。神社の由来に詳しい長老は、残念ながら数年前に他界していた。

に、倭大國敷神社という神社がありまして、この二つの関係が何か重要なことを示唆しているのではないかと気がしています。

祝詞に使われる用語で敷坐という言葉があります。敷は「治める」という意味で、坐は尊敬語です。このことから推測すると、倭大國敷神社の「敷」という文字は、神がその場所を「統治する」という意味でしょう。つまりは、倭大國敷神社の社名は「倭大國が治める」という意味であり、倭大國魂神がその区域を支配していた事実を社名が伝えているように思われます。加えて、「大國敷」という社名の神社は日本に一社、唯一ここにしかありません。

——倭大國魂神とは、どんな神様なのでしょうか。

オキタ／『日本書紀』をひもとくと、ちょうど崇神天皇六年の御代に、天照大神と倭大國魂の二神を祀ったものの、二つの神のパワーが強すぎて、国勢が不安定になったため、淳名城入姫命があらためて祀ろうとしたが、やはり力が強大すぎて姫の髪が抜け痩せ細って衰弱し祀ることが出来なかつた……という意味深なエピソードが出てきます。



長い階段を登った先に、堂々たる大鳥居が見える。



鎮守の森には古墳が存在する。



古社探訪バスツアーで、十数名を倭大國魂神社をはじめとする美馬市の延喜式内社に案内した。(2015年2月頃)

この一文から読み取れるのは、天照大神と比肩するほどのパワーのある神様であることと、祀り方によって国の情勢が揺らぐほどの崇り神でもあり、その存在そのものが国の平安に関係するということ。

「国魂」は令制が整えられて「国家」という概念が登場してから生まれたものであると考えられます。つまり、人間社会が整備された後に生まれた神が国魂神なのです。古代の人々は自分が生まれ住んでいる土地に靈性があると考えていました。その後の時代の人々は、新たな概念である「国土」にもまた靈性が内在していると思ったのでしょう。その靈威が国の興亡に深く関わると考えられたのです。

「国魂」を「やま」との意味

最後に、「国魂」という概念がまだよく分からないので教えてください。

オキタ／国家区分の象徴としての国魂神は各地に出現しましたが、各地の国魂神はその土地でしか存在できないものとして祀られました。各国魂神にはキャラクター設定があり、先ほどの『日本書紀』の記述のように、それぞれに好き嫌いがあって、その性格に基づいて行動を起こします。強烈なプロフィールをもつ存在として位置付けられているのです。国魂神のキャラはその土地そのものの強烈な個性なのかもしれません。

「国魂」と通常の「御魂」の本質的な違いは何でしょうか。



同じ美馬市（旧美馬郡）の脇町に坐す倭大國敷神社。
同じく延喜式内社だが、境内は公園になっており、ジャングルジムが置かれている。

【神社の基本情報】

延喜式神名帳 阿波国美馬郡鎮座
式内社 倭大國魂神社（やまとおおくにたまじんじゃ）
所在地：徳島県美馬市美馬町重清字東宮上3
御祭神：倭大國魂命 大己貴命
式内社 倭大國敷神社（やまとおおくにしきじんじゃ）
所在地：徳島県美馬市脇町字拝原 2404
御祭神：倭大國魂命 大國敷命

オキタ／「倭」という新たなコンセプトに「国魂」が宿り、倭大國魂神という全く斬新な神格が生まれたのです。このことは非常に画期的なことでした。なぜならば、実体のあるものだけでなく、人間社会にある抽象概念であつても神威を帯びることが出来るわけですから。このような発想は非常にクリエイティブであり、未来においても新たな国魂神が生まれる可能性をはらんでいます。人類の長い歴史の中で、わりと最近になって考え出された超国家的なコンセプトにも、「国魂」が宿ることが大いにあり得る。たとえば、日本の感性で考えると「ASEAN 大國魂神社」とか、「EU 大國魂神社」といったものが、将来的に誕生するかもしれない。

時代が変わっていくごとに国家という概念のあり方も、その領域も変わっていきます。国家を超えた営みが必要となり、超国家的なコンセプトが生まれている現代において、「国魂」は非常に理にかなっているといえるでしょう。

また同時に、「国魂」をないがしろにしたならば、地域再生も国土再生も実現しないと思います。国を大事に思うのであれば、私たちがその両足で立っている国の土地を祀る神を大事にし、報恩感謝しなければならぬ。日本人として足元から充実した生活を送りたいならば、その土地の神を掘り起こして明らかにすることが急務でしょう。

「国魂」は統治区分であり生活区分の御霊。古の人々が考えた「国魂」というアイデアの中には、私たちが帰属する土地に対してどう向き合うべきかという教示が込められているように思います。あなたの国の「国魂の神」はどういう神様が、そのことを問い、継承していくことが重要なのです。

インタビューより編集構成／石黒壮明